



**Data**

監督: マシュー・ハイネマン  
 脚本・製作: アラッシュ・アメル  
 出演: ロザムンド・パイク/ジェイミー・ドーナソン/トム・ホルンダー/スタンリー・トゥッチ

### ■ショートコメント■

◆世の中にはいろいろな“過酷な職業”があるが、戦場カメラマンは、その最たるもの。『おやすみなさいを言いたくて』(13年)は、そんな命の危険と裏腹にある報道写真家(戦争写真家)という職業を選択し、そこに命を懸けた女性レベッカを主人公として描いた名作だった(『シネマ 35』220頁)。同作はあくまで架空の物語で、レベッカも架空の人物だったが、『プライベート・ウォー』と題された本作の主人公メリー・コルヴィンは、実在の戦場記者だ。

◆本作を監督したのは、『カルテル・ランド』(16年)(『シネマ 38』114頁)等の骨太のドキュメンタリー映画を発表してきたマシュー・ハイネマンだが、なぜ彼は本作をドキュメンタリー映画ではなく、劇映画にしたの？

2001年のスリランカ内戦を、反政府組織“タミル・イーラム解放のトラ”(LTTE)側からの取材中、同国軍が放ったロケット砲弾(RPG)によってメリーは左目を失明し、以降、黒い眼帯が彼女のトレードマークになった。また、2011年にはチュニジア、エジプト、リビアにおいて、大規模反政府デモ「アラブの春」を報道する際、再びカダフィを直接取材するという勲章を手に入れているから、本作はそんな彼女の行動を中心に据えたドキュメンタリー映画にしてもよかったのでは？私はそう思ったが、チラシ写真に写る美人女優ロザムンド・パイクの黒い眼帯姿を見ると、それはインパクトが強いから、やっぱり彼女をメリー役にした劇映画の方が・・・？さらに、彼女はシリア内戦が起きていたシリア・ホムスで反政府勢力を取材中の2012年2月22日に56歳で死亡しているから、やはりそんな人物はドキュメンタリー映画では扱いにくかったのかも？

◆戦場に赴く間にメリーが見せる“つかの間の情事”は劇映画向きだが、何の抵抗もできないまま砲撃を受ける難民たちと共に過ごすメリーの姿をカメラにとらえるのは、ドキュメンタリー向き。私はどうしてもそう思ってしまうため、本作については最後まで中途半端感が・・・。

◆しかし、ラストでメリーの功績が表示され、ホンモノのメリーの姿を見ると、なおさら中途半端感が・・・。

2019（令和元）年9月30日記